

研究展望(平成27年)

伊海, 孝充 / 中司, 由起子 / YAMANAKA, Reiko / 豊島, 正之
/ NAKATSUKA, Yukiko / 横山, 太郎 / 山中, 玲子 / IKAI,
Takamitsu / 竹内, 晶子 / TOYOSHIMA, Masayuki / ワトソン,
マイケル / FUKAZAWA, Nozomi / TAKEUCHI, Akiko / MIYAMOTO,
Keizo / TAKAHASHI, Yūsuke / WATSON, Michael / 深澤, 希望
/ YOKOYAMA, Taro / 宮本, 圭造 / 高橋, 悠介

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究

(巻 / Volume)

43

(開始ページ / Start Page)

91

(終了ページ / End Page)

122

(発行年 / Year)

2019-03-31

研究展望（平成二十七年）

平成二十七年に刊行された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に発表された論文を取り上げる。例年と同じく、単行本（深澤希望）、資料研究・資料紹介（宮本圭造）、能楽論研究（宮本）、能楽史研究（高橋悠介・宮本・横山太郎）、作品研究（山中玲子・伊海孝充）、狂言研究（中司由起子）、国語学的研究（豊島正之）、比較文学研究（竹内晶子）、その他各分野における能楽研究（横山）、外国語による能楽研究（マイケル・ワトソン）に分類し、分担執筆を行っているため、全体を展望するというより個別の論の紹介が主体となっていることをお断りしておく。また、重要な論稿を見落とすなどの遺漏も少なくないものと思う。ご寛恕を乞う。

【単行本】

『松井家の能 平成二十六年度国立能楽堂特別展示』（国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4判87頁。1月。日本芸術文化振興会）

二〇一五年一月七日～三月七日の会期で国立能楽堂資料展示室において開催された展示の図録。松井文庫創立三十周年

を記念するもので、細川家の家老筆頭である松井家に伝わった能面・能装束・楽器・謡本が展示された。解説（田邊三郎助「松井家の能面」、長崎巖「能装束の歴史と松井家の能装束」、山崎撰「松井家と能」、林千寿「松井家の歴史」のほか、資料の写真・解説・作品リストを収める。

『恋する能楽』（小島英明著。A5判143頁。1月。東京堂出版。一六〇〇円）

観世流シテ方能楽師・小島英明が、自由学園明日館での公開講座「能楽事始め」の資料をもとにまとめた一書。「ラブストーリーで味わう能の魅力」をテーマに、葵上・恋重荷・班女・鉄輪・鞍馬天狗・吉野静・千手・楊貴妃・井筒・錦木・砧・女郎花・定家・通小町・半部・野宮・求塚・清経・采女・住吉詣の二十曲を所収。「恋する詞章」として「心に響くオススメの一節」を掲げる等、さまざまなトピックスから読者の関心を引き出す工夫がなされている。

『国際日本学研究叢書21日本のアイデンティティとアジア』

(法政大学国際日本学研究所編。A 5判272頁。1月。法政大
学国際日本学研究所)

二〇一三年十一月一日〜三日にアルザス欧州日本学研究所で
開催されたシンポジウムの報告集。国際日本学研究所の二〇
一〇〜一四年の研究課題「国際日本学の方法に基づく(日本
意識)の再検討―(日本意識)の過去・現在・未来」の一環と
してのシンポジウムであり、歴史学、地理学、社会学、人類
学など多岐にわたる研究領域からアプローチされた一六本の
論考を収める。

能楽研究からは宮本圭造「能楽は日本固有の芸能か―能楽
の起源をめぐる言説の変遷」があり、言説を通史的に追う
ことで、日本のアイデンティティ形成と能楽との関わりを解
明する。

『池宮正治著作選集2 琉球芸能総論』(池宮正治著。島村幸

一編。菊判532頁。2月。笠間書院。一二〇〇〇円)

沖縄の演劇研究に関する二十五本の論考。「I 文学芸能
総論」「II 組踊論」「III 古典舞踊論」「IV 三線音楽論」
「V 民俗芸能論」「VI 近代演劇論」の六章からなり、「II
組踊論」の第一章には「能楽と組踊」(初出:『国立能楽堂』
第二四五号、二〇〇四年一月)が収められている。

『能・狂言謡の変遷 世阿弥から現代まで』(高桑いづみ著。
菊判284頁。2月。檜書店。八〇〇〇円)

『能の囃子と演出』(音楽之友社、二〇〇三年)に続く著者
二冊目の論集。前書からおよそ十年を経て刊行された本書で
は、謡がどのように確立され、そして脈々と伝承されて来た
のかを紐解く。

「序にかへて くり返すということ―音楽のかたちと伝
承―」にはじまり、以下の三章で構成されている。「第一章
能の謡―華やかなフシをたどる―」では、世阿弥による上ヶ
歌の定型化、世阿弥自筆本・下間少進手沢車屋本の節付、下
ゲゴマの記譜の変遷、『卒都婆小町』・「四季祝言」・「敷島」
の謡復元、に関する六本の論考を収める。「第二章 狂言の
謡―流行歌の撰取と狂言謡―」では、「狂言小歌がすべて拍
子合だったのではないか」という仮説に端を発する「狂言小
歌拍節遡源」のほか、独吟一管「海道下り」・放下の歌・狂
言小舞を分析した三本の論考。「第三章 能の周辺・音楽の
周辺」には、女面・読ミ物・大ノリ謡・唱歌の記述・鼓胴と
多岐にわたる五本の論考がある。あとがき・初出一覧・『卒
都婆小町』復元上演資料・索引を所収する。

なお、高橋葉子(『楽劇学』23。二〇一六年三月)と、藤田
隆則(『能と狂言』14。同年九月)の書評がある。

『日本人は日本をどうみてきたか 江戸から見る自意識の変遷』
(田中優子編。B 5判247頁。2月。笠間書院。一八〇〇〇円)

序に田中優子「今『日本人が日本をどうみてきたか』を考
えることの意義」を置き、I「『自国』を誰が/どの範囲で

捉えるか?」、Ⅱ「和の国」イメージの普及」、Ⅲ「武の国」—願望のゆくえ」、Ⅳ「神の国」—近代をつくった自国認識の登場」の四章立てで、十六本の論考と五本のコラムで構成されている。

能楽関係について触れると、二章のコラムに竹内晶子「世阿弥能にみる日本意識—『平和』と『幽玄』—」と、四章に津田眞弓「仙台藩の能『神皇』—塩竈の神が「異人」を追いかう」の論考がある。

竹内稿は、日本を描く際の世阿弥の特色が「恒久に平和な国として日本を予祝する」点にあることを(白楽天)を例に指摘。さらに中国の故事を素材として取り上げる際には、舞台を日本に翻案し、さらに和歌と結びつけることで「和風化」を図る工夫が凝らされていることを(班女)によって示唆する。

津田稿は、十二代藩主伊達斉邦の命で、藩校学頭の大槻平泉が作能した(神皇)の制作背景を探る内容。(神皇)に見える「西洋の島国」「捕鯨」「薪水給与」「夷狄」「弩炮の備え」の詞章から、文化期の仙台藩における、英国の捕鯨船に対する海防上の危機意識と、蝦夷地警固のための行軍の記憶が、制作の背景にあると指摘する。

『続狂言史の基礎的研究』(関屋俊彦著。3月。菊判87頁。関西大学出版部。八〇〇〇円)

一九九四年に刊行された第一論集『狂言史の基礎的研究』

(和泉書院)の続編であり、集大成と位置づけられた第二論集で、以下の七篇から構成されている。「第I篇 狂言師周辺の天才たち」は、『華道』(日本華道社)に二〇〇三(〇四年)に掲載されたもので、世阿弥にはじまり大槌・二条良基など十八名について語られる。「第II篇 流動期の狂言と大藏弥右衛門家をめぐっての諸問題」には、親交の深い大藏弥右衛門家に関する講演記録と論考六本が収められている。「第III篇 関西の能・狂言考証」では、文政九年大坂勸進能、茂山千五郎家八世久藏英政、土倉徳三郎、井狩辰吉などを取り上げ、幕末から近代にかけての関西の動向を捉える。「第IV篇 能・狂言作品研究覚書」では、狂言《通門》《寝代り》《伊文字》《蝸牛》《附子》《苞山伏》《樋の酒》《空腕》、《翁》《船弁慶》《土蜘蛛》、復曲能《西宮》《恵美寿》の十三曲についての作品研究。「第V篇 能楽史料考証」では、関西大学総合図書館生田文庫に関する解説ならびに資料解題、関西大学図書館影印叢書『能面図』『勸進能并狂言尽番組』の資料解題、東西学術研究所国際シンポジウム「戦争の記録と表象—日本・アジア・ヨーロッパ—」(二〇一二年九月)での基調報告「戦に翻弄された能楽師たちと修羅能」、戦前の台湾で刊行された雑誌『能海』の紹介を収める。「第VI篇 笑いの理論から世界の能・狂言へ」では、能・狂言の演劇性に関する著述、英語狂言、狂言絵ついでなど多岐にわたる内容。「第VII篇 翻刻の章」には『和泉流狂言太夫野村家由緒』(関西大学図書館蔵)と、『大藏虎明問之一本』頭之類・雁言答(大藏弥右

衛門家藏」を収録する。

なお、稲田秀雄(関西大学国文学会『国文学』二〇一六年三月)と、永井猛(『能と狂言』14。同年九月)に書評がある。

『新版日本の伝統芸能はおもしろい 観世清和と能を観よう』(観世清和監修。小野幸恵著。A 4判55頁。3月。岩崎書店。三〇〇〇円)

「第1章 能の世界を見てみよう」、「第2章 能を知ろう」、「第3章 能の歴史」、「第4章 観世先生おすすめの能」、「第5章 観世先生に聞いてみよう」、「第6章 能の家に生れて」の六章で構成されている。観世宗家ならではの視点で、能楽師の修業過程や舞台裏が、噛み砕いて紹介されている。

『能楽研究叢書4 野上豊一郎の能楽研究』(伊海孝充編。A 5判179頁。3月。法政大学能楽研究所)

共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究」の成果物。二〇一三年一〇月七日開催のシンポジウム「生誕一三〇年 野上豊一郎の能楽研究を検証する」の報告集。能の作品を(パフォーミングアーツ)として捉えようとする野上の視点を再検証・再評価する趣旨。シンポジウム当日に展示した能楽研究所が所蔵する野上博士関連資料を口絵として掲載。講演記録に西野春雄「能楽研究の開拓者 野上豊一郎」。発表に基づく論文に伊海孝充「門外漢の能楽研究―野上豊一郎の視座」、小田幸子「ワキの役割―野上豊一郎『ワキ見物人

代表』説と後代の展開・継承」。寄稿論文に宮本圭造「野上豊一郎の能面研究」がある。また、あわせて、深澤希望「野上文庫蔵書目録」、関榮司「野上豊一郎著作目録」を収録する。

『能楽資料叢書1 大蔵虎清 間・風流伝書』(田口和夫校訂。A 5判232頁。3月。法政大学能楽研究所)

共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究」の成果物。法政大学鴻山文庫が所蔵する、大蔵虎清が江戸初期にまとめた間狂言・風流の演出に関する伝書の翻刻。装束付・出入りのきまり・囃子等に関する事項を主とする内容で、風流一五曲と間狂言二三曲(輪藏)重出を所収する。このほか付録として『しきさんばんあいきやうげん』、『狂言印可勘状』、『大蔵虎清狂言伝書』の虎清に関する資料三篇の翻刻を収める。「曲名」と「人物・神仏名」の二種の索引付き。

『能楽資料叢書2 金春安住集 歌舞後考録 御用留』(六麓会校訂。小林健二編。A 5判260頁。3月。法政大学能楽研究所)

共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究」の成果物。能楽研究所般若窟文庫が所蔵する『歌舞後考録』『御用留』の翻刻。筆まめで著名な金春八左衛門安住による克明な活動の記録。『歌舞後考録』第一冊は文政四年十二月〜六年十月(四十〜四十二歳)、第二冊は文政十一年十二月〜十二年十一月(四十七〜四十八歳)の記録。また、『御用留』は天

明二〜四年(二十一〜二十三歳)の半次郎を名乗っていた時期の記録である。『安住行状之大概』と合わせ見ること、近世能役者の日常の詳細な動向を把握することが可能となる。

『能楽資料叢書3 東北大学附属図書館蔵秋田城介型付』(秋田城介型付研究会校訂。A5判265頁。3月。法政大学能楽研究所)

共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究」の成果物。東北大学附属図書館が所蔵する型付(外題には「謡本」とあるが、内容を優先させ「秋田城介型付」と称する)の翻刻。下間少進仲孝に師事した、常陸国宍戸藩主・秋田城介実季が編纂した型付。少進から相伝された『童舞抄』を参照しつつ、自身の実際の稽古に基づき記述していることから、江戸初期の大名の能愛好の一端を如実に伝える点で貴重。(白楽天・定家・船弁慶)など三八曲を所収する。

『多武峰談山能 摩多羅神面と翁―能楽の原点を探る』(松岡心平監修。原瑠璃彦編。B5判55頁。4月。大和多武峰談山能実行委員会)

二〇一二〜一六の五カ年計画で、奈良県桜井市・多武峰談山神社において奉納された演能企画の第三回までの記録。巻頭にエッセイ二本(松岡心平「多武峰の翁」、長岡千尋「神となる仮面」)。次いで、番組と写真による「談山能の歩み」(平成二十三年 奉納 翁/平成二十四年 第一回 談山能

／平成二十五年 第二回 談山能／平成二十六年 第三回 談山能)。最後に、平成二十三年開催のシンポジウム「大和多武峰 摩多羅神面と翁―能楽の原点を探る」の記録として、梅原猛「私と翁・マタラ神―「東日本大震災」と鎮魂」、(報告1)天野文雄「多武峰(妙楽寺、談山神社)の能楽の歴史と『翁』」、(報告2)宮本圭造「多武峰の翁面―その歴史と背景」、(報告3)松岡心平「多武峰の常行堂修正会の翁の位置づけ」、デイスカッション(登壇者:天野文雄・宮本圭造・松岡心平・千田稔)を収める。

『再発見!くらしのなかの伝統文化7(芸能と日本人)』(市川寛明監修。A4変型判55頁。4月。ポプラ社。三一〇〇円) 児童書。能・狂言、歌舞伎、落語、和楽器について紹介。

『職業体験完全ガイド45 能楽師・落語家・写真家・建築家 芸術にかかわる仕事3』(平尾小径編。A4変型判47頁。4月。ポプラ社。二八〇〇円)

児童書。観世流シテ方能楽師・安藤貴康が能楽師の仕事を紹介する。

『みんなが知りたい!日本のユネスコ無形文化遺産がわかる本』(カルチャーランド著。A5判128頁。メイツ出版。一六〇〇円) 児童書。二〇〇八年登録の能楽・人形浄瑠璃文楽・歌舞伎から、二〇一四年までに登録された二十二件の無形文化遺産

について紹介する。

『一橋徳川家の能 平成二十七年国立能楽堂特別展示』(国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4判88頁。9月。日本芸術文化振興会)

二〇一五年九月二五日～一二月一二日の会期で国立能楽堂資料展示室において開催された展示の図録。茨木県立歴史館所蔵資料を中心に、高島屋史料館・金沢能楽美術館・本研究所の関連資料も合せて、江戸後期の能楽史における一橋徳川家が果たした役割をたどる展示。巻頭論文に宮本圭造「一橋徳川家と能」を収める。内容は「一橋徳川家とは」「一橋邸内と城内での能」「一橋徳川家 能の美」「一橋徳川家と謡本」の四つの柱で構成し、資料写真とキャプションを掲載。資料解説・一橋徳川家関連年表を付す。

『塩田王の雅び心 金沢能楽美術館二〇一五年度秋季特別展』(山内麻衣子編。A5判71頁。10月。金沢能楽美術館)

二〇一五年一〇月三日～一二月六日の会期で金沢能楽美術館において開催された展示の図録。製塩業で財をなした野崎家初代武左衛門が、岡山藩融通方御用所の御用掛を拝命した縁で、岡山藩池田家より拝領した九十二面の能面・狂言面のコレクションを中心とする展示。山内麻衣子による解説「塩田王の雅び心―お能とお茶は紳士の嗜み―」と、「能楽コレクション」 「茶道の嗜み」の二部構成で資料写真と解題を収

める。

『新版 あらすじで読む名作能50選』(多田富雄監修。森田拾史郎写真。A5判128頁。10月。世界文化社。一五〇〇円)

二〇〇五年に刊行された『あらすじで読む名作能50』の新版。初版収録のエッセイ(石牟礼道子・小田幸子・加賀乙彦・中村富十郎・水原紫苑・森山開次)は再録されていない。

『曲直瀬道三と近世日本医療社会』(武田科学振興財団杏雨書屋編。菊判89頁。10月。武田科学振興財団)

執筆者代表の町泉寿郎氏の跋文によると、本書は二松学舎大学・二十一世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の一環として開催された「ワークショップ 曲直瀬道三―古医書の漢文を読む―」(二〇〇八年八月、於オレゴン大学)が構想の発端となり、プログラムの報告集を発展させる形で編纂された一書という。曲直瀬道三・玄朔を中心に近世の日本社会における医療を検討する目的で、二六本論考が収められている。

能楽関係では福田安典「曲直瀬と能楽―付、曲直瀬と諸芸」がある。『今大路家書目録』に見える能楽資料を紹介するとともに、番外曲(仲遠)について考察。素材となっている『察病指南』、指南の故事、『医学正伝』の著者である天民老(シテ)を結びつけるものが、曲直瀬道三の講釈であるとし、作者が講釈を聴いていた可能性を示唆する。

『新作能マクベス』(泉紀子編。B5判182頁。10月。和泉書院。五四〇〇円。DVD付)

羽衣国際大学日本文化研究所のプロジェクト「東西伝統演劇の融合―(劇能)の創作と上演―」の第一作目にあたる新作能《マクベス》に関する一書。以下の四章で構成されている。

「第一章 新作能への挑戦」では、泉紀子によって創作・上演までの過程がまとめられ、新作能《マクベス》詞章(付現代語訳)と梗概(日本語・英語・中国語)、シェイクスピア作『マクベス』梗概(日本語・英語・中国語)が収められている。

「第二章 展開、そして発信」は、演出・主演の辰巳満次郎によるエッセイ、野村萬齋と辰巳の間狂言の演出に関する対談、泉の論考「新作能《マクベス》の詞章―韻律の文学・詩劇として―」から成る。「第三章 新作能《マクベス》を考える」は、プロジェクト・メンバーによる六本の論考(鈴木雅恵「『日本』における『マクベス』の受容と上演」、陳怡伶「談新作能《マクベス》中的挪與譯涉及的文化轉譯」(三橋佳奈子訳付)、恵阪悟「修羅能《マクベス》の新味を考える」、中尾薫「新作能《マクベス》の間狂言―古典的劇構成からの逸脱をめくって―」、藤原千沙「能面考―新作能《マクベス》の能面―」、荒木泰恵「能面の分類について」)。「第四章 資料編―ドキュメント新作能《マクベス》―」には、上演記録・装束附・上演写真などの記録と、詞章対訳表(古典語・ローマ字・英語・中国語)を収録する。

『研究叢書464 〈他考としての古典―中世禅林詩学論攷―』

(山藤夏郎著。A5判116頁。11月。和泉書院。一六〇〇〇円)

序説・本論十章・結びからなる大著で、「禪僧はなぜ詩を作ったのか」という問いの解明を目指す。「V 非・人称(変身)の詩学(i)―詩論/歌論/能楽論の交叉する(非)場処―」の「3 メタノエシスの原理としての(心)」と、「VI 非・人称(変身)の詩学(ii)―(我)が既に死んでいるということ―」の「3 死線の彼岸に詩う無響の声」において、「花鏡」「目前心後」「万能箱一心事」や、「風姿花伝」第七別紙口伝「似せぬ位」などの世阿弥伝書や、複式夢幻能の構造について取り上げ、論じる。

『能楽研究叢書5 能楽の現在と未来』(山中玲子編。A5判278頁。11月。法政大学能楽研究所)

共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究」の成果物。二〇一四年一〇月一九・二六日、一一月一〇日の三日間にわたり開催された同タイトルの連続能楽セミナーの報告集。現代の能楽における新しい試みが、伝統的な能楽とどうつながるのか、未来につながりゆく今がどうあるのかを検証する企画。各回ごとにインタビューの記録・報告に基づく論文・全体討議の記録などを収める。

第一日「現代に生きる能楽―さまざまな『現場』から」は、山中玲子「能楽の現在と未来―いま考えてみたいこと―」、深澤希望「新作能一覽(二〇〇六〜二〇一五)」、インタ

ビュー観世喜正・山中玲子「守っていくもの変わっていくもの——現代における能の輪郭」、デイエゴ・ペレッキア「世界の能を目指す——宇高通成と国際能楽研究会」、インタビュー野村万蔵・山中玲子「能楽の可能性と普及——今なにをすべきか」、全体討議(デイエゴ・ペレッキア・野村万蔵・山中玲子、コメンテーター・小田幸子・竹内晶子、司会・宮本圭造)。

第二日「シンポジウム 能のエッセンス・能のかたち」は、横山太郎「どこまでが能だったのか?——歴史的に見た能の輪郭」、竹内晶子「学生が作る新作能 演劇学の授業に能をどう取り込むか」、小田幸子「能と現代演劇の接点——『奇ッ怪 其ノ式』と『地面と床』」、岡本章「『現代能楽集』の作業——練肉工房の挑戦」「付、岡本章企画・演出の『現代能楽集』の連作二覧」、全体討議(横山太郎・竹内晶子・小田幸子・岡本章、コメンテーター・観世喜正・清水寛二、司会・山中玲子)。

第三日「能楽と西洋音楽」は、細川俊夫「能楽からオペラへ」。また、特別寄稿として、網本尚子「新作狂言と狂言普及活動に関する現状と展望」「付、新作狂言一覽(二〇〇六—二〇一四)」Michael Watson「Blue Moons: Transformations of an English Noh Play」、Richard Emmert「Background to Creating *Blue Moon Over Memphis*—The “Evis” Noh」の三本を所収する。(深澤)

【資料研究・資料紹介】

まず、能楽史に関する資料研究・資料紹介から。

『能と狂言』13号(5月)には、「応永三十四年能番組の再検討」と題する世阿弥忌セミナー関連の論文が四本並ぶ。うち三本は、同番組に見える各曲を取り上げた作品研究であるが(作品研究参照)、基調講演に基づく冒頭の永村眞「大乘院寺社雑事記紙背文書」が語る世界」は、同番組の資料性を問題とした論考。同文書が大乘院門主経覚によって書き留められた背景を考証するとともに、その後、尋尊により紙背に綴じられた経緯について推測する。あわせて、能楽関連の紙背文書数点も紹介されるが、文明八年二月日記紙背の「能演目注文」(「安宅」「木曾」が続けて上演され、「鐘巻」の名も見える)など、従来、能楽研究者に知られていなかったものもあつて、興味深い。

同じく『能と狂言』13号に掲載の中嶋謙昌「大鼓方石井家の形成とその後」は、石井良芸に始まる同家の家系について考察したもの。谷口正壽氏蔵の系譜資料「石井一斎方由緒並ニ法名」を紹介し、その記述に基づいて、石井家の芸祖と二代との関係が血縁によるものではなく、大徳寺の還俗僧山岡三甫の子が芸嗣子として石井家の名跡を継承したことを明らかにする。手堅い考証によって、石井家の歴史を記述した論考。

囃子方に関する資料紹介には、佐藤和道「鴻山文庫蔵『乱

舞帳」「能囃子出勤覚」(『東海能楽研究会二十周年記念論集』。12月)もあった。平井七之丞が観世流太鼓方として出演した舞台の出来を、その祖父にあたる尾張藩士の平井平左衛門が番組とともに記録した「乱舞帳」と、平井七之丞(七左衛門)が明治期に出演した番組を書き留めた「能囃子出勤覚」(ともに法政大学鴻山文庫蔵)とを、あわせて翻刻紹介したものの。幕末明治期の名古屋の能楽史を考える上で重要な資料で、今後の活用が期待される。

『演劇映像研究2008』『演劇映像研究2010』『演劇研究』と複数誌にわたって掲載が続いている青柳有利子・入口敦志・江口文恵・木村涼・田草川みずき・深澤希望・竹本幹夫「葛巻昌興日記」所引能楽記事稿は、この年には『演劇研究』38号(3月)に天和四年・貞享元年の二年分が掲載された。能楽関連記事もさることながら、文芸関係の記事にとりわけ興味深いものが多く、現在も前田育徳会尊経閣文庫が所蔵する定家筆「土佐日記」、「うつほ物語」など、前田家の古典籍に関する記述が散見する。なお、貞享元年九月十九日条の解説で、金沢藩の催しでしばしば脇をつとめている「友之進」について、「高安友之進」なのか「能勢友之進」なのか、その判別が難しいとの言及があるが、大倉三忠氏蔵『勸進能記』の元禄四年の竹田権兵衛勸進能番組(同書は元禄二年と誤記する)に「能勢友之進／高安友之進事」とあり、同一人物と考えられる。歌舞伎役者の金子一高「耳塵集」にも、坂田藤十郎と関わってその名が見える人物。

同じく複数回にわたる資料紹介として、『芸能史研究』211号(10月)から、長田あかね「長命茂兵衛家文書(一)」と題する連載が始まった。南山城を拠点とする金春座年預、長命茂兵衛家の文書を翻刻紹介したもの。同家の文書は昭和五十年代に山路興造によって発見され、その後、何人かの研究者によつて活用されてはいたが、まとまった形で紹介されたことがなく、利用が容易でなかった。それが今回、こうして翻刻紹介がなされたことは大変喜ばしく、今後の研究に大いに資するものと期待される。

長田には他に、江戸城の年頭行事である謡初の様子を克明に描いた絵画資料を紹介した「資料紹介 神戸女子大学図書館蔵「江戸城謡初之図」(『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』9。6月)もあった。文献資料と対照しつつ、謡初の三献目の場面を描いたものと考証する。

この年には、近代能楽史関係の資料紹介も多かった。『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』9号には、大山範子「手塚亮太郎・貞三関係能楽資料」が載る。近代の大阪で活躍した観世流シテ方の手塚家の子孫が同センターに寄贈した資料の目録・解説で、末尾に付載された手塚貞三の略年譜も有用である。初代梅若実資料研究会「梅若六郎家蔵『伝授免状印』翻刻」(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』26。3月)は、明治十七年から三十一年までに梅若実が素人弟子に免状を発行した記録の紹介。近代の能楽享受層の実態を知る上で恰好の資料。『武蔵野大学能楽資料センター紀要』26号

には、明治四十三年刊の『観世流太鼓手附』に込められた著者観世元規の意図を読み解いた三浦裕子「観世元規著『観世流太鼓手附』考」も掲載される。

その他、地方の近代能楽史に関するものとして、『東海能楽研究会二十周年記念論集』に米田真理「明治三年桑名佛眼院能楽興行について」、飯塚恵理人「戦前から戦後復興期の東海地域能楽写真」が載った。米田稿は明治三年に桑名で行われた三日間の春日社神能を取り上げ、興行にいたる経緯、出演役者について考証したもので、京都の能役者が多数出演している点に注目する。飯塚稿は昭和十年代から四十年代にいたる能役者の三枚の集合写真（ほか昭和四十年代の演能写真一枚）の紹介。

演出関連の資料紹介にも注目すべき論考があった。佐藤和道「豊橋市中央図書館所蔵『乱舞進退録』と『宗節仕舞付』」（『中世文学』60、6月）は、まとまった型付として最古の部類に属する『宗節仕舞付』と異本の関係にあると見られる『乱舞進退録』の存在を紹介し、両者の間に見られる異同について詳細に検討した論考。これら型付の被相伝者が素人と見られることなど、『宗節仕舞付』の成立につき示唆に富んだ指摘が多い。『乱舞進退録』の書写年代や伝来に関する検討を欠く点は残念だが（手掛かりがなかったか）、成立期の型付の様相を探る上で貴重な資料の紹介と言えよう。

珍しく作り物付を取り上げたのが、中嶋謙昌「江戸後期の作り物図とその演出」（『国立能楽堂調査研究』9、3月）で、

京都大学文学研究科国語国文学研究室蔵『能装束作物一色記』が江戸後期の宝生流の演出を伝える作り物付であることを論じる。著者も言う通り、作り物の歴史の変遷については不明な点が多く、井浦本「能作物之図」をはじめ、作り物付の年代特定はなかなか難しいのが現状である。今後、同様の研究蓄積が求められよう。

最後に、月刊『観世』見返して連載中の「観世文庫の文書」で紹介された資料を以下に挙げる（括弧内は担当執筆者）。「重習関寺小町型付」（松岡心平）、「鶯流間狂言四冊本」（橋場夕佳）、「水干模様下絵」（柳瀬千穂）、「脇所作付」（恵阪悟）、「おほえかき」（深澤希望）、「寛政五年日記」（江口文恵）、「ワキ型附」（中司由起子）、「大橋流太鼓獅子欄序預状」（宮本圭造）、「香式」（落合博志）、「観世左近宛狩野祐清書状」（小林健二）、「野々宮・松風伝授免状」（山中玲子）、「羽衣、ハツカ、ワヅカに付御尋書上」（倉持長子）。（宮本）

【能楽論研究】

能楽論研究はこの年も少なかった。重田みち「足利義持時代の美意識」（『芸能史研究』208、1月）は、日本文化史研究における室町文化に対する評価の変遷を歴史的に押さえた上で、世阿弥の能楽論において応永二十年代以後、「冷え」や「さび」といった概念が強調されるようになるのは、義持時代の文化的美意識を反映したもので、そうした美意識が義政のいわゆる「東山文化」にも継承されていったことを明らかに

にする。

同じく重田「世阿弥の能楽伝書『花伝』花修篇の性格と相伝に関する問題」(『演劇研究』38。3月)は、『花伝』第六花修が一貫して作能論として執筆されていること、その主張は義持時代を経て、世阿弥自身の手で大きく見直されることになり、『三道』などに発展的解消される一方で、『花修』の文章の一部は後年、『風姿花伝』に一部転用を見たこと、『花修』そのものは後に不用の伝書とされ、元雅や禅竹には伝承されなかったことなど、『花修』をめぐる大胆かつ斬新な論が展開されている。傾聴すべき見解であり、今後の活発な議論が期待されよう。(宮本)

【能楽史研究】

以下、おおよそ時代順に、能楽史研究の論文を紹介する。まず、中世の宗教的な場と能の関わりについては以下二本。山路興造「高野山麓の猿楽と田楽」(『芸能史研究』21。10月)は、主に中世の高野山麓で行われた猿楽と田楽について総合的に考察する大部な論考。高野山麓に残る中世の能面等にも言及する一方で、紀ノ川中流域の隅田八幡宮の放生会や一宮である日前国懸神社の祭祀における芸能、粉河猿楽、貴志猿楽、吉野猿楽(檜垣本猿楽)、天野丹生都比売神社や吉野郡天川の猿楽について、多くの関連史料を紹介しつつ、その実態と歴史的経緯を分析し、さらには高野山麓に専門の田楽座が存在した可能性についても言及している。高野山上では

芸能が原則禁じられていた一方で、天野社では半僧半俗の行人方の長床衆による延年が行われていることや、高野山上に所属する色衆と呼ばれた僧が古佐布(古沢)郷を拠点として素人猿楽を行っていた可能性を指摘するなど、山上で修行をする僧が山麓の芸能に関わっていたという論は、これまでの高野山のイメージを覆すものである。

宮本圭造「能はいつから神事芸能になったのか」(『国立能楽堂』381。5月)は、元来は多武峰寺維摩八講会の猿楽や興福寺修二会に伴う薪猿楽など、仏教寺院の法会に関わる面が強かった猿楽が、寺院圏の中でも鎮守社で演じられるようになり、薪猿楽も「薪の神事」(『金鳥書』)とされていくように、神事芸能へと転換していった経緯を概観する。そうした転換を促す要因として仏教法会の神仏習合化を挙げており、同じく寺院法会に伴うものであった舞楽が諸国一宮制の成立を背景に神事芸能の一つとなっていたことへの言及も興味深い。また、同じく宮本圭造「大和の村落祭祀と能—大和猿楽の存立基盤—」(『万葉古代学研究年報』13。3月)は、大和盆地における大和猿楽四座の室町期の活動の痕跡を探る論考。舞庄遺跡から出土した父尉面の一部などの二・三例を別にすれば、大和盆地には大和猿楽の活動の痕跡が少ないようにみえるが、八尾市歴史民俗資料館に寄託されている「カクトウノチヨ」(楽頭帳)、『神事長』(神事帳)の分析から、戦国時代に平群谷から大和盆地西部にかけて、神事能が盛んに行われていたことを明らかにしている。これら二書は、金剛座の座

衆による資料が、高安座に伝えられたものと考えられるという。また、享保十一年（一七二六）に金春分家の大藏菊次郎が大藏家所持の楽頭職一覽を記した帳簿『楽頭預り控帳』（金春宗家蔵）をもとに、室町前期の大藏十郎信喜等の時代から受け継がれた可能性が高い楽頭場所の大半が大和の村々にあり、それらが南都禰宜衆等に預けられていたことを併せて指摘する。そして、観世大夫を除けば、中世の大和猿楽の諸座の多くは、大和の郷村の神事能で精力的に活動し、その禄物を主要な収入源にしていたという。後代の史料であっても室町期の大和猿楽の実態をうかがわせる重要な史料を手堅く分析しており、注の中でも、円満井座がもともと薬師寺所属の猿楽として成立した可能性などに言及している。

この年は能面についての論考が多かった。まず、『國華』で能面特輯として掲載された、田邊三郎助「能面芸術の形成（上・下）」（『國華』120（6・11）。1月・6月）は、室町時代から戦国時代までを主な対象として能面制作史を描き、第二十七回國華特別賞を受賞した論考。『申楽談儀』「めんのこと」からわかること、「東山文化のなかで」「中央と地方」「天下」の時代、「仮面譜」前後」という五章からなる論考に加え、重要な能面、都合二十面について詳しい解説を付している。世阿弥時代の能面、また『藤涼軒日録』文明十七年（一四八五）六月二十八日条に観世大夫家の面として言及される「四十枚」の能面、そして宝生・金春・金剛・梅若の本面の実像について、文献と現存能面の双方から探るのをはじ

め、越前出目などの展開、「天下」号を受けた面打の展開、越前出目における女面の萬媚の創作など、能面に関する多岐にわたる問題を扱っている。個別の能面解説にも本論と関わる論考的な内容が多く含まれており、室町期の能面制作史に関する総合的な研究となっている。

宮本圭造「面打ホウライ考」（『能楽研究』39。3月）は、『天野目家伝書』『仮面譜』等に挙げられる面打ホウライ（表記は多様）を、具体的な能面刻銘に基づき、蓬萊永近・高近という十六世紀前半に活動した面打に比定する。また、蓬萊が面類の制作を本職とする甲冑師であったことや、永近の一族が能登・加賀を拠点に活動したことを指摘し、鍔仙会に「本面宝来作」と朱漆銘のある増女が「蓬萊女」といわれる蓬萊作の女面の面影を伝えることを推測する。面類という一種の仮面を制作していた面類師が能面の制作にも関わっていたという点は特に興味深く、能面研究に新たな視点を加えるものといえよう。

『万葉古代学研究年報』13号（3月）には、奈良県立万葉文化館の第7回委託共同研究「伎楽面・舞楽面・能面・狂言面の比較研究」の報告が載る。このうち、見市泰男「伎楽面・舞楽面・能面・狂言面の比較研究―素材と技法の変遷」は、能面・狂言面の制作・修復や舞楽面・伎楽面の制作に関わった経験を元に、素材・技法という観点から、伎楽面・舞楽面・能面の比較を行ったもので、制作者ならではの観点から仮面制作における様々な素材・技法の長所・短所が示されて

いる。例えば、四天王寺の陵王面の彩色下の漆からフノリと膠が検出されていることに着目し、フノリ・膠引きが顔料の接着の改善に役立つことから、この技法が能面にも用いられた可能性を指摘しており、室町期における能・狂言面の素材・技法の多様性の中には、先行する伎楽面・舞楽面の素材・技法を必要に応じて活用していることがうかがえるという。また、大谷節子「能と能面」は、翁面の発生について先行研究を整理し、翁面は猿楽が翁を表芸にする以前に存在していた可能性に言及、岩井直恒の『覚書』にみえる江州長浜の上津原(甲津原)の産神社の翁面の雨乞靈験譚が現代にも伝承されていることを紹介した上で、翁面が雨乞を含めた農耕儀礼とその信仰に関わっていることを重視し、能面の中での翁面の特異性に注意を促す。

世阿弥伝書の記事については、岩崎雅彦「この道の聖とも聞えし本座の一忠」について(『鏡仙』645。3月)がある。田楽の一忠が『風姿花伝』奥義篇で「この道の聖」といささか大仰な表現で位置づけられる点について、歌論や連歌論における同様の用例から考察している。「聖」は、歌論では草創期から『古今集』時代に大きな業績を残した先人の歌人に対して用いられる一方で、連歌の世界では、宗御『密伝抄』や心敬『ささめごと』において救済が「この道の聖」とされており、こうした歌論・連歌論における歴史叙述の定型的様式を踏まえた結果の言い回しであるとする。

中世末期については、芸能関係記事を含むイエズス会宣教

師達による日本報告に関する、パトリック・シウエマーによる論文が二本ある。いずれも宣教師達による日本報告を、ヨーロッパで出版された翻訳版本『報告集』ではなく、ローマにあるイエズス会文書館蔵の原報告などに基づいて検討している。「大坂城本丸の能舞台をイエズス会日本報告の原本から読み解く」(『能と狂言』13。5月)は、大坂城本丸の能舞台についてルイス・フロイスが書いた記事を取り上げ、原本とこれを編集・翻訳した17世紀の報告集、さらにそれを編纂・脚色した18世紀のイエズス会正史及び明治の太政官訳などを比較し、脚色・改竄・誤解の様相を分析する。そして、大坂城本丸の能舞台が床面を含めて全体的に梨子地で裝飾されていた可能性に言及する。また、「キリシタン能」再考―イエズス会日本報告の原本から(『能楽研究』39。3月)は、主に九州地方のキリスト教会におけるキリスト教劇に関する記事を取り上げ、用語の検討も含めて劇の実態を分析する中で、従来「切支丹能」と称されていたものについても能と特定できないと指摘する。

近世能楽史については、論文が少ない。渡部実音「『梅津政景日記』にみる能楽と茶の湯、贈答について」(『秋大史学』61。3月)は、出羽国久保田藩(秋田藩)の家老梅津政景(一五八一―一六三三)の日記中の能楽・茶の湯・贈答等の文化関係記事を取り上げたもの。深見道叱の能に藩主・佐竹義宣が鼓を打ち、梅津政景が狂言を務めた元和四年(一六一八)六月の記事や、喜多七大夫の浅草での勸進能を佐竹義宣が見物し

た記事などに言及する。

中尾薫「観世大夫元章の革新と明和改正謡本」(『国立能楽堂』383。7月)は、観世元章の事績を概観し、明和改正謡本は「正しい」本説の使用、矛盾のない、筋の通った劇進行に重きをおいた結果であるとして、元章の个性的な芸術家としての側面の見直しを提唱する。

天野文雄「堀麦水『謡俚診察形子』と現代の能楽観」(『鏡仙』64。2月)は、加賀の俳人・堀麦水が安永九年(一七八〇)に脱稿した宝生流の謡曲注釈書『謡俚診察形子』について、(木賊)理解を例にして、その謡曲理解的確さを紹介する。『謡俚診察形子』が近世の他の注釈書とは異なり、能の戯曲としての全体像、詞章の文脈や一曲のねらいの究明を目的とする点を評価しており、近年、著者が能の一曲にわたる作意や主題の理解を重視する中で、堀麦水に先駆的な役割を見出している。

村上尚子「加賀藩主前田斉泰の弘化二年御本復御祝能と能装束について」(『国立能楽堂調査研究』9。3月)は、加賀藩主前田斉泰(一八一〜一八四)が能を舞うことが脚気の治療に役立つと考えていたことを紹介、斉泰の演能の経緯や、弘化二年(一八四五)に脚気からの本復を記念して行われた御祝と、そこで行われた六日間の能の様相をみた上で、四点の能装束の畳紙に「弘化二年二月」の年記があり、これらが本復記念能のどの曲に用いられたかを推測する。(以上高橋)

この年は本阿弥光悦が鷹峯の地を賜わって四百年の節目の

年にあたることから、琳派と能に関する論考が多く見られた。月刊『観世』は、「琳派と能」という特集を組み、河野元昭「琳派とはなにか」(7月)、西野春雄「琳派に響く能の諧調美」(8月)、伊海孝充「光悦謡本はどのように作られたのか」(9月)、内田篤呉「光悦蒔絵にみる謡曲の意匠」(10月)、古田亮「羽衣」のイメージ」(11月)、榊原吉郎「神坂雪佳の見た能の世界」(12月)を掲載した。その多くは、光悦や光琳が能を深く嗜んでいたこと、その作品に能の世界が色濃く反映されていることを論じる。もともと、絵画や蒔絵に見られるそれらの図様・意匠を、能に取材したものと見るか、あるいは、能のさらに原拠となる古典文学作品に取材したものであるかは、なかなか判断に迷うところであろう。右のうち伊海稿は、それまで嵯峨本と呼ばれた光悦謡本について、「光悦謡本」という呼称が定着したことによる弊害を指摘し、いくつかの新たな問題点を提起する。

美術史研究と能楽史研究の両方にまたがる研究として、表章「写楽斎藤十郎兵衛の家系と活動記録」(『能楽研究』39)もあった。一九九八年の法政大学能楽セミナーにおける同氏の講演を原稿化したもの。浮世絵師写楽と目される斎藤十郎兵衛の履歴、及び斎藤家の系譜を、例によって膨大な記録・番組類に基づき詳細に論じた文字通りの労作であり、今後の美術史研究に与える影響は少なくないと思われる。(以上宮本)

続いて近代能楽史関係。

羽田昶「芸談から読み解く「能」」(『芸能史研究』208。1月)は、近代のシテ方の芸談から近代能楽史研究、技法研究、能楽師の能楽観のそれぞれについてどのような知見が得られるかを論じる。まず近代の芸談に史料的价值のある記事が見られることを指摘し、特に観世清孝の人となり伝える記事を紹介。次に『六平太芸談』『観世華雪芸談』に見える芸談論をいくつか例示し、そこに近代的な作品解釈や詳細な型の記述が見られることを指摘。最後に、現代とは異なったシテ方の気質をとりあげ、とりわけ「囃子を稽古しない／囃子に合わせすぎない」という態度に注目し、その積極的意義に言及する。

「京都における「伝統」という言語——大念仏狂言・能楽・京舞・祇園祭を例として」(『演劇学論集』60。6月)は、日本演劇学会二〇一四年度秋の研究会におけるシンポジウムの記事。四人の登壇者が、大念仏狂言(山路興造)、京観世の能(大谷節子)、井上流京舞(岡田万里子)、祇園祭(村上忠喜)のそれぞれについて、京都という土地へ根付いた伝承の様態を分析するという趣旨のもとで発表と討議をおこなった(中尾薫司会)。「芸能の「伝統」というと、ともするとプロフェッショナル(玄人)の閉じた共同体のなかで身体から身体へ安定的に伝承されるイメージを抱きがちだ。この討議はむしろ、その時代ごとの社会的・経済的な条件のもとでこれらの芸能に関わった素人や庶民とのダイナミクスのなかで、伝統が形成されてきたことを浮かび上がらせた。

王冬蘭「満洲の撫順における能楽——梅若流謡曲師範梅田富三郎親子二代を中心に」(『芸能史研究』209。4月)は、中島謙昌「梅田富三郎とその時代」を受けつつ、そこで扱われていない富三郎の一九二六年以降の活動、正太郎の活動、常設舞台「梅田舞台」の実態などを明らかにする。『満鮮謡曲界』『満州梅若』『梅若』『謡曲界』等の当時の雑誌記事の調査のほか、梅田の弟子や当時撫順に在住した関係者への取材に基づく研究の成果である由。富三郎が指導する中核的な社中である嚶鳴会の月一の例会が一九四二年までに通算三〇八回開催されたこと、正太郎が『満州梅若』の主筆として健筆を振るい、国家主義的な立場から能楽の意義を称揚するような文章を多く書いていたこと、満州でもっとも多く利用された能舞台であった梅田舞台が、小規模ながら本格的な結構を備えた能舞台であったことなど、満洲能楽の具体的な様子を伝える貴重な研究である。(以上横山)

【作品研究】

本年に発表された作品研究を山中・伊海で分担して展望する。「観世」「能と狂言」「東海能楽研究会二十周年記念論集」は山中が、「中世文学」「鏡仙」は伊海がまとめて担当している。

雑誌「観世」で平成25年5月から始まった特別企画「観阿弥生誕六百八十年世阿弥生誕六百五十年 能の大成者たち」は本年3・4・5月の三回に分けて観世宗家と松岡心平の対

談を掲載して終了。作品研究の最後は〈高砂〉が取り上げられた。

宮本圭造「能〈高砂〉の変容―治世賛美から夫婦和合へ―」（1月）は、諸処で問題になる後シテの人体について、近世以前の演出資料からは老体の神の痕跡は窺われず、本来は怪士系の強い面が用いられる「荒ぶる神」であったことを確認する。そのうえで、邯鄲男を着ける現行諸流の演出は、治世賛美を主題とする〈高砂〉が、次第に夫婦和合の能として受容されるようになった結果であること、江戸幕府においても、中期以降、將軍宣下能よりも婚礼祝儀や若君誕生の祝賀能で演じられることが多くなつたこと、さらに、石門心学の謡講釈でも〈高砂〉一曲を通して親孝行を説いていたこと等を、行き届いた資料の調査に基づいて明らかにする。

渡部泰明「『高砂』の和歌的世界」（2月）は、〈高砂〉の詞章を和歌研究者の視点で緻密に分析する。「衣・波・風・月」という歌ことばが「相互に、またさまざまなイメージと結びつきながら、一曲の展開に寄与していること」を丁寧に説いたうえで、本曲の詞章には、和歌における「題詠」に際して歌人が一首の歌を生み出すに至るプロセスが「生動する形で示されている」とし、その具体例として、『住吉社歌合』（嘉応二年）での「社頭月」や『延文百首』（延文元年（一三五六））での「浦松」の題で詠まれた歌の数々を紹介する。特に後者は、初めての武家執筆による勅撰集『新千歳和歌集』編纂への祝意を込めて海辺の名所の松を、波や風など多様なイ

メージに結びつけて詠んでいることを指摘し、この百首歌の事業が「世阿弥の創作の母胎に含まれていなかったらどうか」と問いかける。典拠研究の枠を大きく超えて能の詞章生成の過程、ことばとことばが結びついて新たなイメージが広がる様相を示してくれる論として興味深く読んだ。

〈高砂〉に関しては、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』9号（6月）にも大谷節子「能『高砂』の解釈史」が載る。江戸時代を通して行われた〈高砂〉の作品解釈や「相生の松」の理解等について、『諷増抄』『和諷如巴鈔』『謡注解』『高砂講按』『高砂考真字倭文』『謡曲参考鈔』他、多数の資料（能の研究者にはあまり知られていなかったものも多い）を詳しく紹介し、古今伝授、心学の講釈など、それぞれの執筆者の知識・教養の背景や「神儒仏三教で能を解く試み」の盛行等にも幅広く目を配りつつ、その変遷をたどる。また、『諷増抄』以前に既に行われていた「能の内容を咀嚼して提示する試み」として「問語り」を位置づけ「能の本文に対して付された最も早い注釈の営為」とする。教えられることの多い論だった。

『能と狂言』13号（5月）は、前年8月の世阿弥忌セミナーで行われたシンポジウム「応永三十四年能番組の再検討」の成果を収録している。そのうち、作品研究は三本。

天野文雄「『応永三十四年能番組』所見の《仏原》の作者―禅竹の六輪―露説との関係をめぐって―」は、〈仏原〉終曲部の詞章「一滴の露のはじめをば、なにとか返す舞の袖、一步

上げざるべきをこそ、仏の舞とは言ふべけれ」に見える「一滴の露」という表現および「一步上げざるべき」¹¹「仏の舞」という考え方に注目し、これが後の「六輪一露説」で説かれる「能芸美の理想ときわめて近似している」ことを指摘する。さらに、(仏原)全曲を通して「露」の語が六例あること、『五音三曲集』『六輪一露秘注(寛正本)』に見える「声仏事をなす」が二箇所に引かれること、「祇王祇女仏とて、温顔舞曲花めきて」(クリ)の「おんがん」が世阿弥や禅竹の伝書に見える「音感」の可能性が高いことの三点を挙げ、(仏原)が禅竹作であろうとの説を提示する。説得力のある説と受け止めた。応永三十四年の禅竹は二十三歳。禅竹の作品という点、(定家や野宮)のような能を考えがちだが、当然ながら彼にも世阿弥の指導を受けていた若い時代があることに気づかせてくれた点でも魅力的な論だった。

樹下好美「(佐保山)の構想―ワキ藤原俊家流と醍醐寺理性院の周辺―」は、(佐保山)を「禅竹阿熟期の作」とした自説(博士論文の一部。未発表)を変更し、本曲について「醍醐寺理性院の周辺で企画された松木家復興の祈りを込めた祝言能であり、松木家関係者からの依頼と情報提供を受けて世阿弥周辺でつくられ、清瀧宮御遷宮能あたりで披露されたのではないだろうか」と推定する。作者については禅竹説を捨て、(吉野山)の作者でもある元雅を候補とする。「ワキ俊家の登場に説明抜きで意義を認め」、「勅勘の人俊家が春日詣の利益で末繁盛となる筋書」を提供できるのは、俊家の子孫である

松木宗宣またはその子弟しかいないとの判断である。宗宣の弟宗観が醍醐寺理性院大僧正であったこと、宗宣の子息二人が醍醐寺に入り満濟の稚児となったことなどの指摘は興味深い。松木家関係者からの依頼と情報提供」と言うにはもう少し材料がほしいようにも思う。また、無理に禅竹作説を捨てることもないのではないか。「禅竹が(佐保山)を大切にしたのは元雅からの相伝だったからかもしれない」とまで考えるのなら、禅竹の若書きという可能性についても、天野稿にある(仏原)などと併せ検討してみたい。

伊海孝充「曾我虎」から曾我物・曾我伝承の展開を考える」は、応永三十四年能番組に登場する「曾我虎」を(虎送)とする従来の説(表章・竹本幹夫・佐藤和道)に対し、(伏木曾我)説を提示する。古写謡本(虎送)のシテは五郎であること、シテ五郎が酒を持って登場し舞を舞う演出は(安宅)等の展開を真似て作られたものと考えられること等を指摘したうえで、(虎送)の成立を「早くても十五世紀後半」と想定する。一方(伏木曾我)は、寛正六年の將軍院参能で演じられている観世座に縁の深い曲であること、他の曾我物と違い夢幻能形式で「曾我伝承の世界の再現」を目的としていること、同番組所載の(忠信)と類似性(最期の場面に立ち会った女性が霊を弔う)があること等から、よりふさわしいとの説である。また(伏木曾我)成立以前に、本説たるなんらかのテキストが存在していたと想定する。夢幻能で曾我伝承の世界を再現する形が曾我伝承に男舞の見せ場を付け加えるよりも古いとい

う点にはもう少し詳しい説明がほしいし、最期に立ち会った女による弔いといえは元雅作とされる〈朝長〉との関係も気になるところだが、〈伏木曾我〉の可能性があるという指摘自体には耳を傾けるべきだろう。

同じく曾我物の能に関しては、『文学論叢』89号(2月)が原田香織「謡曲曾我物の世界―仇討と祝祭の系譜―」を収載。「謡曲曾我物が何をテーマとすることにより、祝言性を確立していくのか、その展開と未刊謡曲の作品群について検討していこう」とするもの。現行の六曲に関しては、「富士の卷狩」という場の設定と兄弟の男舞(相舞)に注目しているが、個々の作品の検討はほとんどなく、全体を大きくまとめた概説になっている。また、未刊謡曲については、応永番組の「曾我虎」に相当する曲かとも言われている(虎送)と江戸時代に文人の慰みに作られて上演もされていない謡曲を一括し、五十音順に並べて概観になっていることも残念。時代も制作背景もひとまず置いて、曾我物全体を見通すのが目的なのかもしれないが、作品研究に実績のある筆者なので、個々の作品についての詳細な分析も望みたい。

このほかの作品研究のうちの担当分を以下にまとめて挙げる。池田英悟「頼政」に見る老境の世界その三―能「頼政」の中の「老い」、頼政の人生における「老い」(『武蔵野大学音楽資料センター紀要』26。3月)は、二〇一二年から続いた論の完結編。〈頼政〉の前場では「宇治の川長」「宇治の橋守」などの歌語を意識させる詞章制作によって、後場では「老武

者」の語の効果的な使用によって老いを描くことを指摘する。後半は、能〈頼政〉からは離れ、老歌人としての頼政の姿を『暮春白河尚歯会和歌』から探る。

加藤森平「謡曲〈落葉〉小考」(『同志社国文学』82。3月)は、「源氏物語」「源氏小鏡」と謡曲〈落葉〉の比較を通して、〈落葉〉の主題やシテ落葉宮の描かれ方を探る。「落葉の宮から夕霧への執心」ではなく「夕霧から落葉の宮への執心」が主題という田口和夫説に従いながら、舞の段に置かれる「横笛の…」の和歌の効果に注目し、「亡き夫柏木に想いを残し続けた女性」という新たな落葉宮像を創出したとする。全般的に『源氏物語』の分析にくらべて謡曲の分析は大雑把な印象があり、〈定家〉と〈落葉〉の比較も表面的に思えるが、柏木を想い続けているという指摘自体は面白い。ただしその場合、全体の主題としても「夕霧から落葉宮」ではなく「落葉宮から柏木」への執心を読み取らなくてよいのかという疑問は残った。

『東海能楽研究会二十周年記念論集』(12月)収録論文の中で作品研究は、三苦佳子「阿漕という幽霊―能「阿漕」の作者―」、延広由美子「謡曲「正尊」の起請文をめぐって」、橋場夕佳「(井筒)と(高安)―変容する紀有常娘と高安の女―」の三本。三苦稿は、詞章の分析には面白いところもあるが、序破急五段説と〈阿漕〉との関係についても和歌の引用についても、世阿弥作の可能性に結びつけようとして無理が生じているように思われる。「度重なる」という語が何度も出てく

るとの指摘などは、むしろ「同じことを書くべからず」という『申楽談儀』の教えに逆行するのではないか。延広稿は、歴史学の先行研究を踏まえて起請文の形式や様々な種類を紹介しつつ、〈正尊〉の起請文の内容を考察し、この起請文は「義経の生きた平安時代末にはありえず、作者長俊の生きた時代のものである」と結論づける。橋場稿は、〈高安〉で描かれる胸のうちにたぎる思いを抱えた紀有常娘のイメージが、〈井筒〉のシテにハタラキを舞わせる室町末期の演出に影響したのではないかと推測する。(以上、山中)

『中世文学』60号(6月)には、平成二十六年年度中世文学会春季大会シンポジウム「南北朝期・室町期の文学と諸芸能」の報告が所収されている。廣木一人「連歌師という「道の者」は連歌師という存在の捉え直しから、その特殊性と他文芸の担い手の共通性を考えようとする論。網野善彦が示した「道の者」という定義から考察することにより、連歌師を上層階級と同じ文化を共有した者、社会からその専門性を認知されていた者たちとして捉え、職業芸能者・職業文学者の社会的位置を把握しようとする。芸能における、プロ／アマ、玄人／素人の区別の難しさと、曖昧さゆえに生まれた文化の一面面を知ることができた。

櫻井陽子「世阿弥時代の平家物語」は平家物語の本文と能の詞章を詳細に比較することで、世阿弥が用いた『平家物語』を検討する論。〈鶴〉〈実盛〉〈忠度〉の分析を通して、覚一本を遡る本文が存在する可能性があること、本だけでなく語

りから得た情報もあり得ること、作品ごとに用いた本文が異なることなどを指摘し、世阿弥の手元には常に平家の本文があったわけではなく、たまたま入手した本文(必要に応じて入手した本文)を用いたと推測する。また同氏には、本稿では触れられなかった読み本系と能に關係について論じた「世阿弥の時代の平家物語 その二―読み本系を中心に―」(駒澤國文』52。2月)という別稿もある。〈清経〉では読み本系を骨格としつつ、入水を描く終曲部では一方系が用いられ、〈忠度〉では語り本を骨格としつつ、平家物語の世界を組み替えるために読み本系が用いられていると分析し、世阿弥は平家物語の必要箇所の本文を読み込み、それを再構成して作能したと推測する。「世阿弥が用いた平家物語」という視点が興味深く、現存本文だけでは説明がつかない部分を考える上で、有効な視点を示している。

落合博志「和歌・連歌・平家と能および早歌―諸ジャンルの交渉」は能と連歌について、レトリック面だけでなく、それぞれの芸能の構想自体に見出される影響關係を考察した論。典拠をもたない〈班女〉と連歌寄合書と比較し、単に寄合語をはめ込んだのではなく、その寄合語に基づき曲の構想自体を考察したと推測する。また室町時代後期以降の連歌は、能(謡)を強く意識した上で詠まれていたことを指摘し、連歌制作の場と謡享受の場が接近していったと推測する。とくに連歌寄合書自体が、ある意味能の本説となっていたという見解は非常に新鮮だった。

これらの論の前に、当日司会を務めた竹本幹夫のコメントも所収されており、廣木稿については世阿弥と「道の者」との交流の場の重要性について指摘する。櫻井稿については、本論を支持しつつも読み本系『平家物語』との関係にも注意を喚起する。落合稿については、シンポジウムの発表にはあったが本稿では割愛されている国立歴史民俗博物館蔵高松宮本『六家抄』紙背の早歌本にある宗砌作の早歌「四季恋」について補足説明をした上で、能と早歌の影響関係の重要性を再確認する。

『鍊仙』の研究十二月往來の作品研究は七本。重田みち「幽霊能の「旅僧」の性格―遊行、救済する僧を何と呼ぶか―」（4月）は「諸国一見の僧」と呼ばれることの多いワキ僧を再考する論。現在は「旅僧」という一括りにされてしまいうワキは、その法統に注目すると、時宗の上人やシテの縁者のように、各曲に個性が存在することを指摘する。従来何となくやり過ごしていたことへ目を向けさせてくれる論であった。高桑いづみ『井筒』待つ女の名ノリなど』（5月）は（井筒）の正体明かしの場面からこの曲の特異性を考察した論。

（井筒）の中入前に、シテが自らの正体を三度も名乗ることは異例であると指摘し、これを「待つ女の静かな絶叫」だと読む。また（井筒）と（野宮）の小段構成上の類似点についても言及が及ぶ。宮本圭造「能（求塚）の原形―どこまでが観阿弥の作か―」（6月）は（求塚）の観阿弥原作・世阿弥改作説に関する補強論。先行研究でも問題になっている中入前の詞章を分

析し、「さらば埋もれも果てずして」とそれに呼応する後場冒頭部分は、改作の痕跡だと見て、もともとは小竹田男と血沼丈夫も登場していたと推測する。興味深い説であるが、「改作があった」ことを忘れて一つの物語として読み、宮本説を検討してみたいところである。山中玲子「小書」の呼称と池内信嘉（7月）は「小書」という名称の流布をめぐる論。江戸時代までは「小習」などと呼ばれていた特殊演出の名称が、「小書」と呼ばれるようになったのは明治時代になつてからであり、これを積極的に用い広めたのは池内信嘉であつたと推測する。首肯すべき論だと思ふが、そうするといつどこで「小書」という言い方が生まれたのかについても気になつた。小田幸子「水無月祓」と「水鏡」のモチーフ（10月）は古台本に基づく（水無月祓）の作品論。古台本には、六例見られる「みそぎ川」の重要性に着目し、それに関わる舞の段の「水鏡」はシテが狂気から覚めるための自己認識の役割を果たすと指摘する。さらに、シテが内省的に自己を見つめる世阿弥時代の作品の中で、水鏡が効果的に使われてきたことを整理した上で、（水無月祓）もその系譜にあることを確認する。本論によって、（水無月祓）が世阿弥作である蓋然性がより高くなつたのではないだろうか。竹本幹夫「唐船」の作風と趣向（11月）は従来「ウシヒキノ能」唐船説、応永の外寇関連説から考えられることが多かった唐船の構想を再考する論。狭い船内で楽を舞うという設定は（邯鄲）からの影響と推測する。さらに、親しい者との離別譚という観点

から(蘆刈)(俊寛)と比較し、シテの一貫とした心理を描く心理劇ではなく、各場面の面白さを追求した遊舞能であると捉える。本論の指摘は、定説化している「ウシヒキノ能」唐船」説の再考を促すものでもある。作品研究ではないが、(景清)のシテの背景から盲僧と猿楽の関係を考える、松岡心平「景清の深層」琵琶法師と猿楽の間(12月)もここで触れる。猿楽と平家はもともと大地の精霊を鎮めたり動かしたりする芸能集団だったという共通点があるだけでなく、室町時代初期には両芸能とも大和結崎という場と地縁があったという近似性を指摘する。

その他の論文五本をまとめて挙げる。山中玲子「(檀風)「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐって」(『文学』16―2。3月)は、ワキの習事になっている(檀風)における、阿闍梨が資朝の死骸を引き取り供養する演技の考察。資朝と梅若の恩愛・本間の情けを描く前半と本間を討とうする後半とを矛盾と捉え、間をつなぐ資朝を弔う「孝養の場」の重要性を指摘し、その演出の変遷と流派の差異を考察する。孝養の場に着目する論自体面白く読んだが、(谷行)の死骸を抱く演出との類似に言及している点が興味深く、能における山伏の描き方を考える好材料となると思う。

姫野敦子「中世文学における死と救済―怪異の視点から能「鶴」をめぐって―」(『清泉女子大学人文科学研究所紀要』36。3月)は(鶴)を通して世阿弥が「救済」をどのように捉えていたかを考える。成仏自体は描かずそれを希求する姿を描く

修羅能と比して、(鶴)は終曲部においても成仏が保留状態になっていると考え、世阿弥はこの曲を通して成仏の困難さを観客に訴えたと推測する。世阿弥が「成仏」「救済」がいかなるものかを示すために能を作ったのか、ということ自体に疑問を覚えた。

村谷佳奈「謡曲「黒塚」考―シテの心理描写から読む―」(『金沢大学国語国文』40。3月)は鬼女説話を援用し、(黒塚)のシテの造形を考察する論。説話における鬼女は、男への執心から鬼と化し、人を食おうとする鬼の心と同等に自身を恥じる心を持っている分析する。その鬼の造形をもとに、糸繰りの場面が、シテの鬼性と人としての苦悩が繰り返し表れることを象徴していると読む。(黒塚)と「磯崎」のような鬼女物語とをどこまで重ねられるかが問題だろう。

中野賢治「謡曲(鶴飼)と「鶴飼伝説」―近世石和遠妙寺縁起の形成と展開―」(『山梨県立博物館研究紀要』9。3月)は(鶴飼)と石和遠妙寺の鶴飼伝説の成立を検討した論。中世の石和で殺生禁断が行われた証拠は皆無のため、(鶴飼)が深い思惑もなくこの地を舞台とした作り能であると考え。また、遠妙寺の鶴飼伝説は、受不施派と不受不施派の対立が激化する慶長年間ごろに成立したと考え、鶴飼伝説がこの寺の存在意義を高める「切り札」となったと推測する。(鶴飼)が石和を舞台とした理由については、もう少し慎重に考えたいところである。

「雨宮久美」謡曲「石橋」から探る聖なる象徴としての「童

子」と「老翁」(『国際文化表現研究』11。5月)は(石橋)の前シテに関する考察。中国説話・詩文の分析を通して、前シテの童子もしくは翁は、文殊菩薩示現の場への先導役として相応しい存在であったと分析する。同氏には古代中国・古代日本の獅子と牡丹の表象から、(石橋)で牡丹を使われる背景を考察した「日本における牡丹と獅子文化の形成と謡曲」(石橋)、『国際関係研究』10月)もある。(以上、伊海)

【狂言研究】

狂言研究は例年に比べてやや少ない傾向にあった。まず狂言・問狂言台本の翻刻をあげる。狂言研究会による「『文久写本狂言集』(愛知県立大学附属図書館蔵)翻刻(9)」(『あいち国文』9。9月)は翻刻連載の九回目。(栗焼)から(惣八)までを掲載。鷲仁右衛門派の特徴が見えることを指摘する。飯塚恵理人「佐藤友彦師所蔵九冊本問狂言「女問」」(『相山女学園大学研究論集人文科学篇』46。3月)は、大蔵流とみなされる問狂言台本の第二冊目の翻刻。地方に伝承される狂言の資料については、山本晶子「馬瀬狂言資料の紹介(8)―「花子」について―」(『學苑』891。1月)がある。馬瀬狂言保存会所蔵の明治二十六年に記された狂言台本「花子」と、『狂言記』・古典文庫本の比較をおこない、馬瀬狂言の伝承の一端を考察した論。馬瀬狂言(花子)の前半は古典文庫本に近似する和泉流山脇派の台本を使用しつつ展開を簡略化し、一部に『狂言記』の詞章を用いていること、後半はほぼ全体的

に『狂言記』の詞章を用いた構成になっていることを指摘する。後半が『狂言記』に拠っている構成の理由に、馬瀬狂言資料中に他にも一部『狂言記』を元にした曲が伝承されている点、馬瀬神社の例大祭では多数の演目が上演されるため、時間的にも技術的にも長時間の上演が困難であるので、古典文庫本よりも歌謡の数の少ない『狂言記』を取り入れたことをあげる。

狂言の歴史資料を紹介した松本大「山脇元業自筆『狂言由緒略書』の紹介と翻刻」(『詞林』58。10月)は、矢田勉氏蔵元業自筆本「狂言由緒書」翻刻と、それを狂言共同社旧蔵本・蓬左文庫蔵本と比較し元業自筆本の特徴を述べたもの。元業自筆本には文政元年十一月の年記があることから書写年代が特定できるとする。諸本と比較して元業自筆本には歴代宗家の略歴がないことから、由緒を授ける対象によって内容を選別していた点や、『和泉流狂言由緒書』を基盤として成立し、時代が下るに従い大きな増補改訂が加えられていった可能性を提示する。

中世末期・江戸初期の出版・学問史の視点から狂言資料を扱った論に、野上潤一「大蔵虎明「語問之抄」について―寛永年間の文化と中世末期・近世初期学問史の一隅をめぐって―」(『中世文学』60。6月)がある。大蔵虎明による問語の注釈書「語問之抄」が拠った資料・本文を明らかにし、そこから見えてくる学問と出版文化をめぐる問題を考察した論。『語問之抄』で引用が明示される典籍としては「古今伝授切

紙・『源氏物語系図』等があり、引用が明示されない典籍としては『庭訓往来註』・『和漢朗詠集私註』・『百人一首抄』等をつけて、『語間之抄』が中世末期・近世初期における最新の学問成果を幅広く摂取している点を論じる。さらに『本朝神社考』・『野槌』等といった林羅山による編著が利用されており、当時の最先端の資料の利用が確認できる点も特色にあげる。依拠本文に関しては、刊記が明記されているものは寛永八年が下限であり、『語間之抄』の成立との関連が問題になるとする。無刊記整版の本文利用についても、具体的な事例をあげて各書籍の刊行年を分析し、寛永附調整版が多く用いられていると指摘。『語間之抄』の資料価値は、引用された本文の系統や版本の版種を特定でき、無刊記整版の刊行年次の下限を数多く解明できる特殊性にあるとする。

絵画資料と『天正狂言本』をつき合わせ、図柄を解釈し古型を探る研究には、田口和夫『狂言絵』(二人袴)を読む(『鏡仙』643。1月)がある。国文学研究資料館蔵「狂言古画図」の(二人袴)と『天正狂言本』(はかまさき)を照らし併せた論。「狂言古画図」では二人の人物が長袴ではなく、半袴を前に当てる図柄になっている点について、(はかまさき)が舅の失敗談として、舅と太郎冠者が太郎冠者の半袴を替るがわる着る趣向であったことを指摘し、「狂言古画図」に描かれる二人の人物が舅と太郎冠者であると解釈する。また、(はかまさき)の舅と太郎冠者が後ろと後ろを合わせて舞うという記事について、現行のように袴を前後二つに裂いた袴で

あれば、二人が背中合わせになる必要がないとする。その上で「狂言古画図」の半袴の横が、一か所のみ裂けて二人が横に繋がった図柄から、二人は単独の舞はできず、舞台を廻るために背中合わせになる必要があると指摘。(はかまさき)も「狂言古画図」のように袴の一個所のみを裂いて、二人が横に繋がって相舞をする演出であったと考察する。

作品研究は以下の四本。稲田秀雄「(シンポジウム)唱導説話と芸能 狂言における説法の摂取と消化」(『どちはぐれ』の位置)、『説話文学研究』50。10月)は、(どちはぐれ)の作品史に占める位置について、狂言における説法・唱導の摂取と消化の視点から考察した論。天理本・虎明本等を読み解き、(どちはぐれ)は複数(三人)で演じる天理本の形態が本来であり、虎明本(及び続狂言記等)はそれを独狂言に改変したものと指摘する。(どちはぐれ)の僧の独白に引かれた一定の章句は聴衆の進むべき方向を示し、現実の出来事を仏教の世界観である六道になぞらえるという説法・唱導の叙述構造や構想と一致するとし、(どちはぐれ)の独白は「僧が自分自身へ向けて行方一種の説法」と見ることができると論じる。(鳥説法)〈魚説法(宗論)等の説法・唱導はそれ自体が話芸として完結したものであり、(泣尼)〈無布施経(寝替)の説法は劇の展開に即して一定の役割・機能を担っていると分析。論中に上げた順が作品形成の順を示すものではないと断りつつも、狂言に摂取された説法・唱導が独立性の高い話芸から劇中劇へと展開してきた様を指摘する。このような展開の中におい

て、聴衆のいない説法という形で劇中に消化された例として、〈どちはぐれ〉を位置付ける。〈どちはぐれ〉の形成に関しては、「貧僧の重ね齋」のような諺を発想の源としつつ、筋の展開については「法華直談抄」の説話を参照して骨格が作られ、僧の独白については「自分自身へ向けられた説法」として説法の構想や叙述構造を応用して作られたことを想定する。関屋俊彦「狂言歌謡―呼声―《蝸牛》に寄せて―」（『国立能楽堂』384。8月）は、本来和泉流は御所御用専任の流儀であったとし、御所で催されていた平家の催しに接する機会があり、そのことが「呼声」などの平家節に影響を与えた可能性を指摘する。林和利「狂言「二人大名」のパロディー意識」（『東海能楽研究会二十周年記念論集』。12月）は、〈二人静〉と〈二人大名〉の共通点として烏帽子姿で同じ扮装をした役が同じ動作をするなどの点をあげ、〈二人大名〉が〈二人静〉のもどきであるとする。ただし〈二人大名〉には〈二人静〉の詞章をもじった部分がないので、あくまでも構想・着想上にとどまると指摘する。同じく東海能楽研究会の記念論集から田崎未知「狂言〈柑子〉考―狂言と漢籍―」は、〈柑子〉の成立において漢籍が果たした役割を論じる。〈柑子〉の申し開きで使われる「好事門を出でず」の諺を「柑子門を出でず」とした着想の典故として、中国宋代の説話集『北夢瑣言』の「好事不出門、惡事行千里」を新たに指摘する。宋代・前代の類書を原本とする『太平御覧』巻九百六十六の皇帝に柑子を献上する説話における同音の取り違えは、〈柑子〉に通じる点があるとし、さら

に『蒙求』「陸續懷橘」と天正狂言本（こうち）の類似点と相違点を分析。類似点としては三つの柑子、柑子を懐に入れる、柑子が転がるなどがあり、相違点には申し開きが相手を得させるものであったか否かにあると考察する。内山弘「天正狂言本抜書（その4）「もち酒」「ござごとう」（『国語国文薩摩路』59。3月）は、『天正狂言本』（もち酒）の歌謡詞章の「代もち」に「城持―白餅」が掛かっていることを、『天正狂言本』で用いられる「代」の表記調査から確認した論と、〈ござごとう〉の「我が名を何とあかしかた」の掛詞についての論。

教育と実演に関するものには以下の二本があった。金久寛章「狂言を教育に生かす…古典演劇教育の実践を通して」（『大阪青山大学紀要』8）は、筆者が大阪市咲くやこの花高等学校演劇科において実践した狂言指導の実際と結果を分析した論。狂言の稽古に生徒の人格形成に資する点が大きく、教育的側面が多分に内包される点を指摘する。ウエスタハウトガート・トーマス「狂言ミュージカル…日本の伝統文化の新しい表現方法」（『金城紀要』39）は、筆者が主宰する石川県小松市の大杉ミュージカルシアターで上演された、狂言作品を翻案したミュージカルの紹介。（中司）

【国語学的研究】

坂本清恵「謡の連声」（『能と狂言』13号）。世阿弥自筆本から現行に至るまでの用例を博搜して、撥音系（安穩・アン

ノン)、舌内(ヒ)入声系(次項)、促音系今日は・コンニツタ)に分類して挙例し、世阿弥自筆本に促音系が無い事、その他の連声も、「増価意識」、つまり「日常的な発音とかけ離れたもの」が「由緒があるように仕立てられていった」ものであり、中世の音韻の化石的な残存とは異なるものと結論する。安原貞室「かたこと」などの「増価意識」には、「謡に用いられているから」という可能性を認める。又、ロドリゲス文典の連声関連の記載に、謡曲が影響しているとする指摘も興味深い。

今期は、国立国語研究所「日本語歴史コーパス」が、室町時代篇として虎明本狂言集(大塚光信校訂本による)を公開した事に拠る論が開始された。今後も続くであろう。

北崎勇帆「虎明本狂言集に見られる命令・要求表現」(『東京大学日本語学論集』11)は、主として「敬度」、上位・下位の関係に基づき「さしめ」「せられひ」「なされひ」などを分類した、先行研究の整理。独白での自身への命令「一つも二つも同じ事、食へ」(栗焼・食ッテシマエ)の指摘が興味深い。続いて、渡辺由貴「虎明本狂言集」における「と思ふ」と「と存ず」「日本語歴史コーパス」を利用して(『国立国語研究所論集』9)。「と存ず」は目上、観客の前での名乗・独白で使われ、「と思ふ」はそれ以外が優勢と観察し、中世軍記などと共通だが、観客を意識する表現は狂言特有とする。対象を「と存ず」思ふ」に絞るが、「と」と「存ず」思ふ」の直結の例のみ拾っているため、「とは存じ」「とこそ思

へ」等が落ちており、中には「と、存ずる」「と」の後の「」が一語としてコーパスに登録された例(「薬水」)の様なコーパスのコーディング不統一由来の用例欠落もあって、機械的な用例絞り込みの手法に疑問を残す。虎明本には「存じらる」の様な主語敬語が接続する例もある(現代語では非文なので、果たして一概に「謙讓語としての用例」と言い得るであろうか)。

田中牧郎「『日本語歴史コーパス』による平安時代と室町時代の語彙の比較」(『国語研プロジェクトレビュー』61)は、高頻度語彙(累積使用率80%まで)中の漢語を、分類語彙表の分野別に分類して、「平安和文では、人や物といった具体物を指す語が多くを占めていたのが、室町狂言は、関係や活動など抽象概念を指す語が多くを占める」様に変化したとし、「文体差を要因とするよりも、時代差を要因とすると解釈できる」というが、室町時代語を虎明本狂言だけで代表させるには無理があるろう。又、虎明本では漢語は異なり語の23%であるのに、平安和文では漢語は僅かに7%であり、それが和語・漢語という語種に由来するのか、語種に拘わらず「具体物を指す語」に比して「関係や活動など抽象概念を指す語」が増加しているのか、という検定を欠いている。

次は「日本語歴史コーパス」に拠るものではないが、神永正史「中世末のテアル文にみられる完成の用法について」(『日本語の研究』112)。テアルの有情物主語の完成(パーフェクト以外)用法が、以前のタリの用法を侵し、結果タリ

(更にタ)はテンス用法へ移行する事の例として虎明本を引く。このテアルは更にタへと移行するが、神仏が発話者となる尊大を強調する表現では、化石的に後の虎寛本にも残存し、それが中古以来テアルの形態自体は一貫して変化が無い事に拠るといふ指摘は興味深い。

酒井知子「日葡辞書と狂言・笑話集のオノマトベ形態による分類を中心に」(『立教大学日本語研究』22)は、天理本狂言六義・虎明本狂言・醒睡笑・日ボ辞書(見出し語)からオノマトベを抜き出して、形態パターンごとに整理したもの。(豊島)

【比較文学研究】

宮崎真帆「パウンドとウエイリーの捉えた能のすがた——謡曲『経政』の英訳を例として」(『Albion』61)は、ともに初期の能の英訳者であるパウンドとウエイリーの、それぞれの(経政)訳を詳細に比較する。省略・創作の多いパウンド訳は、凝縮された文言で経政の心理を表現しようとする。一方ウエイリー訳は、とりわけ音楽に関する文言を注も交えて丁寧に訳出し、経政にとって音楽と救済が分かちがたく結びついていることを明らかにする。能を一部の高貴な観客層のためのものと考えたパウンド、室町当時の人々にとっては理解困難なものでなかった筈と考えるウエイリー、両者の能理解の差異が、こうした訳の違いをもたらししたものとして論じている。

ジョン・サルズ、ジョン・オグルヴィー、ガート・T・ウエスタハウト、ジュリー・A・イエツィー(司会)「シンポジウム 能狂言の外国方言——古典芸能の英語版とミュージカルへのチャレンジ」(『演劇学論集』60)は、同年の日本演劇学会秋の研究集会における同名のシンポジウムの報告である。能の伝統的様式に則る英語能を創作するシアター能楽の創立メンバーでもあるオグルヴィーは、リチャード・エマートによる(隅田川)英語台本を例にとって、能の力はその様式と演者の技術に存しており、上演言語は二次的なものであると説く。石川県小松市の大杉ミュージカルシアター(OMT)を主宰するウエスタハウトは、狂言作品の筋を用いたミュージカル作品を創作する上での様々な工夫を詳述し、役者にとっても観客にとってもこれが狂言への親しみを増す契機となっていると論じる。サルズはフランスのファルス『洗水桶』からうまれた狂言(濯ぎ川)、さらにその複数の日英二言語バージョンの台本をとりあげ、英語狂言を創作する際の台本上の工夫を紹介する。

小笠原匡、和栗珠里「仮面喜劇の源流を求めて——狂言とコンメディア・デッラルテの根底にあるもの——」(『桃山学院大学総合研究所紀要』26)は、桃山学院大学共同研究「地域連携」(「中近世の日本とイタリアにおける仮面喜劇の生成発展と現代の実践について」)から生まれた共著論文。狂言の項を小笠原が、コンメディア・デッラルテの項を和栗が担当している。狂言とコンメディア・デッラルテの共通点としては

従来、類型的な登場人物やプロットが取り上げられることが多かった。それに対し本稿では、両者がそれぞれ演劇ジャンルとして確立する以前に内包していた自然信仰や呪術的側面に焦点をあてる。

他には、能・狂言の手法を用いた西洋演劇作品の上演をとりあげる論考が三点。澁谷義彦「能・狂言様式の『マクベス』野村萬斎演出・主演『マクベス』の三人の魔女」(『国際地域研究論集』6)は、二〇一三年に上演された野村萬斎構成・演出・主演、河合祥一朗脚色の『マクベス』において、主役二人と魔女三人のみからなる劇中劇構造が、いかに能のシテ一人主義と俯瞰的な狂言の視点の双方を取り入れることを可能にしているかを明らかにする。武部好子「現代西洋演劇における能楽的要素の意義——見えるものと見えないもの——」(『就実論叢』45)は、同年十月の日本演劇学会における発表に加筆訂正したもの。ジョナ・サルズ演出の能法劇団による一連の公演や笠井賢一演出の『クワッド』(二〇〇六年など)、ベケット劇を能・狂言の手法を用いて上演した公演事例をとりあげる。見えるはずのものを舞台空間に出さず、その場がない筈のものを(後見などの形で)舞台上に出すという能の手法が、ベケット劇が表現する身体空洞性を強調すると説く。ツヴィカ・セルベル「境界を越えて…ユダヤ劇『ディブツク あるいは二つの世界の間で』と日本の伝統演劇における例の出現」(『演劇研究』38)は、能・狂言の手法を取り入れた著者自身による演出を例に引きつつ、『ディ

ブツク』における亡霊や憑依の描き方と、能・歌舞伎作品におけるそれとを比較する。(竹内)

【その他各分野における能楽研究】

■受容

天野文雄「近代日本の能楽観とその遡源——謡曲「綴れ錦」説をめぐって」(『舞台芸術』19号)は、謡曲文は一貫性を欠いた引用の継ぎはぎであると揶揄する「綴れ錦」説を扱う。著者はこれを、文学作品としての一貫した主題よりも芸の善し悪しに能楽の価値を認める近代の能楽観を象徴する言説とみなし、その実例を批判的に検討する。まずその反例(つまり謡曲のうちに一貫した主題を見出した例)として三島由紀夫をあげ、彼の謡曲理解の「深さ」が『近代能楽集』の達成に影響していると論じる。次に、作品の全体的なねらいよりも部分的な芸の巧拙を論じる能評の系譜(坂元雪鳥、大河内俊輝)をあげ、それが「綴れ錦」説と一体の現象であると論じる。同じ事が、近代の能役者の芸談についても指摘される。そして、こうした能楽観を乗りこえ一曲のテーマを重視した人物の例として堂本正樹と観世寿夫をあげる。総括として芸だけでなく作品の主題把握が今後ますます必要とされることを訴えたいうえで、最後に「綴れ錦」的な考え方の起源を展望し、それが能楽の古典化がはじまった室町後期であるという見方を素描的に示した。

■経営学

西尾久美子「能楽の人材育成——世阿弥の「年来稽古条々」をキャリア論で読み解く」（『現代社会研究』18号、11月）は、能楽の人材育成の特色を世阿弥の文献から明らかにすることを目指す。世阿弥の「年来稽古条々」における年齢段階ごとの稽古のあり方の議論を、専門職におけるキャリア形成の観点から読み解いた。世阿弥は、キャリアの初期は被育成者のモチベーションを、キャリアの中期は技能を客観視する力を、キャリアの後期は加齢による技能変化と組織的な能力発揮の自覚を、それぞれ重視している。このようにキャリア形成の節目を意識したうえで技能を磨く必要性を説く世阿弥の考え方は、著者によればホールやフェルドマンら現代のキャリア論に通じるところがある。

■音楽教育

奥忍「能楽師と共に創り上げる能の表現学習 《船弁慶》を中心に」（『音楽教育実践ジャーナル』12巻2号）は、学校の音楽教育に能を導入するプロジェクトの報告。京都府、学校長、大学・学校教員、能楽師によって構成される伝統音楽普及促進事業実行委員会が、文化庁の委託を受けこれにあたった。（教員や学生を対象とした能楽師による実技講座）（授業に利用できるDVD教材の作成）（同教材を用いた示範授業）それぞれについて、当初のねらいと、参加者アンケートの検討結果を示した。特に注目されるのは『船弁慶』を用いたD

V D教材の開発だ。映像や学習用横書譜を見ながら子供が謡を実践できるような工夫をしたことについて述べる。これらの取り組みを紹介しつつ、能楽師に頼ることのできない学校でも音楽教育に能楽を取り入れる可能性について考察している。

渡邊康、一色忍、飯塚恵理人「能楽囃子の義務教育課程音楽課程での単元化のための教材試作——早笛をモデルとして」（『椋山女学園大学研究論集人文科学篇』46号）において、以前から能楽囃子の五線譜化に取り組んできた著者らは、実例として登場楽「早笛」の詳細な五線譜を示した。五線譜化と並行して、西洋音楽の楽節構造の要素である部分動機、動機、小楽節、大楽節の概念による早笛の楽曲分析をおこない、「一見単純だが極めて複雑な構造が成立しており、それによって奥の深い聞き飽きのしない音楽となっている」と述べる。ただし本論文はその方法論の提示にとどまり、「奥の深さ」の具体的な説明にまでは及んでいないようだ。この研究の背後には、伝統的な対面教授が難しい学校教育では、こうした楽曲分析が重要だという著者らの認識がある。西洋式の楽節分析と五線譜化が最適なのかは私には評価できないが、少なくとも能の音楽の仕組みや魅力について授業担当者が語る必要があるという本論考の認識は前掲奥稿と共通しており、私もまったく同意する。

■心理学

黄下成子「心理検査に使う…能面テスト 社会適応能力を測定する心理検査」は、発達障害の診断において用いられる表情認知能力の検査方法として、能面(小面)を利用する方法の有効性を論じたもの。ここであげたのは、この論文の心理学上の意義や妥当性について論評するためではもちろんなく、心理学において能面を用いた表情認知研究があることを紹介するためだ。この論文は、先行研究をレビューするなかで能面の表情認知に国民性の影響があることを述べており、その点でも有益である。能面の表現力を美学的に論じるような研究をしていく場合に、今後はこうした心理学上の成果を適切に参照することが必要となるかもしれない。

■建築

秦明日香、河内浩志「大江宏の『国立能楽堂』における「うち」について」(『学術講演梗概集2015(建築歴史・意匠)』)は、国立能楽堂の設計で知られる建築家・大江宏の「うち」の思想がどのようなものであるかを確認し、それが国立能楽堂にどう実現しているかを分析する。大江の考える「うち」とは、安心して住まうことができる場所だが、物理的に「外」から隔てられた内部ではなく、そこに至るまでの主体の移動と行為を伴った時間的経過のなかで心的な隔たりが生まれるような場所である。著者らによれば、こうした思想は、国立能楽堂において意匠的な柱によって象徴される「間積り」の手法によって具体的に表現されているという。

大江宏の子で国立能楽堂の設計にも携わった建築家・大江新は横浜能楽堂、金剛能楽堂の設計で知られる。彼の関わった文章が二つある。まずエッセイ「能をとりまく建築(一)」(『二二』(『観世』82巻7〜11号)。(一)では能舞台の広さが六二間か関東間か京間か、柱間の測り方、柱自体の太さといった要素で決まることを述べる。名古屋能楽堂の舞台が大きい事情、国立能楽堂の橋掛りが深い事情にも言及する。(二)では屋根の形に切妻・寄棟・入母屋の三タイプがあること、曲線にてり・むくり・そりの三種があることを述べる。(三)は装飾論。鬼瓦・懸魚・蓼股・組物の見方を教え、また鏡板の松に関して、国立能楽堂建築の際、森田曠平が描いた松の下絵の段階で「大きすぎる」という議論があったことを紹介する(結局当初構想通りに完成した由)。

もう一つは、『楽劇楽』22号(3月)における、第二二回大会公開講演会「楽劇の上演空間を考える」の記録。まず奥富利幸による講演「能楽堂の変遷」。内容は奥富の著書『近代国家と能楽堂』を要約したもの。能の上演空間における対面式、囲繞式、入れ子式の三方式のそれぞれについて、歴史的な系譜を辿り、さらに近代の能楽堂において改築の際にこの方式が変遷した実例を紹介する。次に大江新、観世鏡之丞、中村雅之、みなもところうが登壇したシンポジウム「楽劇の上演空間を考える」の記録(司会は金子直樹)。みなもとが西洋式劇場と能楽堂の空間経験について、観世がシテの立場から「どんな空間であっても舞う」ということについて、中村

が横浜能楽堂館長の立場から能楽堂のマネジメントについて、大江が建築家の立場から能楽堂のデザインについて、それぞれ語り、その後には能楽堂にまつわる様々なトピックについて討議がされた。特に照明については、舞台と客席の明るさの関係などをめぐり、興味深い議論がなされている。

酒井一光「大阪能楽会館」〔建築と社会〕96巻115号、2月）は、連載「再読関西近代建築——モダンエイジの建築遺産」のうちのひとつ。二〇一七年末に閉館した大阪能楽会館（一九五九年竣工）は建築家・竹腰健造の作品である。本稿は竹腰の著書『能楽三昧』『懐旧譜』によりながら竹腰が「望月」「道成寺」「卒都婆小町」を舞い、新作能「世阿弥」を書くほどの能数寄であったことを指摘したうえで、外観や内部構造の特徴を多くの写真とともに説明する。また、「なるべく面が曇らないように二階席を低く設計した」「目付柱を取り外し可能にした」といった工夫を竹腰が語っていることを、「建築と社会」（一九五九年5月号）に掲載された「設計者のことば」から紹介する。

辻植一郎「宮中能楽場関係史料の発見とその基礎的考察」〔学術講演梗概集2015（建築歴史・意匠）〕は、大正大礼の能楽御覧のために仮設され、後に華族会館に移された能舞台についての研究。国立公文書館蔵「宮内省二關スル大禮書類」（3A-21-1礼）と、同蔵「大禮記録」（3A-19-1礼）から発見した図面と仕様書を検討した。座席配置については、皇族・外国貴賓や陪臣用に丸椅子、陪覧所にはベンチを採用し、

ほかに柵席・棧敷席があったことを明らかにした。また、客席へ温風を吹き入れる暖房設備や、シャンデリアを配置した照明設備など、設備計画の詳細がわかった点が興味深い。

高村雅彦らのグループが、「弘化勸進能絵巻」（能楽研究所蔵）の能舞台および劇場空間全体を読み解き、建築的な復元を試みた研究の成果が二本。勝美太貫ほか「能舞台の寸法体系」（前掲『学術講演梗概集』）と橋爪満帆「敷地と演能空間の寸法に関する考察」（同）。前者は儀礼目的の武家屋敷と興行目的の勸進能との舞台空間の寸法体系（江戸間、中京間、京間）の異同を分析し、弘化勸進能の空間復元の参考としたことを述べる。後者は、弘化勸進能の舞台以外の敷地などの寸法体系を検討し、明治の地籍地図等の分析をふまえて江戸間であることを明らかにし、今後の演能空間全体の復元の基礎となることを述べる。

【外国語による能楽研究】

◎単行本

○Emmert, Richard. *The Guide to Noh of the National Noh Theatre. Play Summaries of the Traditional Repertory* 4 (N-Se). Tokyo: National Noh Theatre, 2015. (リチャード・エマート著『国立能楽堂の能楽ガイド——現行曲の要約、4巻』総頁数百四十二頁。

能の構造を解明する細かい英文要約。ABC順、〈仲光〉より〈接待〉までの梗概と丁寧な場面説明。全四十一曲。

- Watson, Michael, and Reiko Yamataka, eds. *Expressions of the invisible: a comparative study of noh and other theatrical traditions*. Noh Research Studies, 3. Tokyo: Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University, 2015. 総頁数百二頁。
<https://hosei.repo.nii.ac.jp>
 以下の二論文が掲載されている。
 Ashley Thorpe, "Observations on the importances of the *yao/koshi* [腰] to the actor in Japanese *nō* and Chinese *jingju* ('Beijing opera')." 一九—三八頁。
 山中鈴子 "Expressive style in Noh: monologue, memory and movement" 四三—六二頁。
 次の他以下のホームページ報告二〇。
 〈ホームページ〉
 Celia Macfarlane and Sarah Whatley の小論文 "Verging on the magical: Noh and contemporary dance meeting in dialogue" 六四—六八頁。
 〈報告〉
 Michael Watson and Ashley Thorpe "Royal Holloway, University of London: Demonstration and Roundtable" 九—一五頁。
 Michael Watson "Workshop in Oxford: Roundtable" 七五—八五頁。

◎論文

- Abé, Ryūichi. "Revisiting the Dragon Princess: Her Role in Medieval *Engi* Stories and Their Implications in Reading the *Lotus Sutra*." *Japanese Journal of Religious Studies*, Vol. 42, No. 1 (2015), pp. 27—70.
<https://www.jstor.org/stable/43551910>
 仏教専門家阿部龍一氏(ノーバード大学、ライシヤワー日本研究所日本宗教担当教授)による龍女縁起についての秀逸な論中、わずか五頁ではあるが、謡曲「海士」における仏教的背景についての詳細で意義ある考察がなされている。
 四五—五〇頁。
- Geilhorn, Barbara. "From Private *Zsuzuki* to the Public Stage: Female Spaces in Early Twentieth-Century *Nō*." *Asian Theatre Journal*, Vol. 32, No. 2 (Fall 2015), pp. 440—463.
<https://muse.jhu.edu/article/592537>
 ガイルホルン氏による二〇世紀初頭における女流能楽師、職業女流能楽師と素人女流能楽師の両者について、『謡曲界』、『能楽』などの雑誌に言及された山階明子などの記事を精査してまとめている。「女流演能論」(一九二二年)についても触れる。
- Stippoli, Roberta. "Warrior/Monk, Demon/Saint: Humor and Parody in the Late Medieval Tale of Benkei." *Mommu-*

menta Nipponica, Vol. 70, No. 1 (2015).

<https://muse.jhu.edu/article/596313>

御伽草子についての論であるが、謡曲「橋弁慶」、「船弁慶」、「安宅」など『義経記』やその他『御伽草子』や幸若舞などと密接に関わる作品、特に異本『武蔵坊絵縁起』を取り上げ、謡曲との関係に触れる。

○Zhao, Xiaohuan. "Ghosts and Spirits in Zaju and Noh." *Journal of Comparative Literature and Aesthetics*, Vol. XXXVII, Nos. 1-2 (2015), pp. 1-21.

シドニー大学教授Zhao氏による夢幻能と中国元時代の「雑劇」における霊魂についての詳細な比較。

(マイケル・ワトソン)